

## 主体の問題と地理学

ヴァンサン・ベルドゥレイ\*, ダニエル・ラプラス＝トレチュール\*\*,  
グザヴィエ・アルノー・ド・サルトル\*\*\*  
(荒又美陽\*\*\*\* 訳)

Vincent Berdoulay, Danièle Laplace-Treyture, Xavier Arnaud de Sartre  
La question du sujet et la géographie  
Cahiers de géographie du Québec, 2010, 54-153, p.397-418  
(Traduction autorisée par les auteurs et par l'éditeur)

### 要旨

地理学においてはあまり明示されてこなかったものの、主体の問題は個人に新たな光明をもたらすものである。それは個人が自身の状況から得ている認識について、また物理的なものであれ社会的なものであれ、決断や行動にのしかかってくる規定に直面する際の自由あるいは自律の役割について、問うことである。本論は地理学における主体の問題の大きな争点、それに取り組むための場所の資料探索法、開発との関係、表現と書き方の困難の問題を順に扱っていく。

キーワード：主体、場所、開発、書き方

個人主義と社会をなしているものに関する問いがはっきりと重みを増しつつある現状の中で、人文・社会科学は個人(individu)についての関心を改めなければならないところに来ている。人文・社会科学が個人に割くべき場において、認識論的、理論的、方法論的議論が多数なされてきた。社会的な規定(déterminations)の非常な強さと、個人に与えられた決定の自律性の中で、一般的に、そしておもに社会学や哲学の進歩に支えられながら、非常に多くの提案がなされてきた。地理学はこの試みから外れておらず、また無関心でもなかったのだが、まるでその議論の中心には届いていないかのように、貢献はしばしば副次的なところに追いやられていた。そうではないので、我々がここで強調したいのは、まさに地理学の貢献の妥当性についてなのだ。とはいえ、地理学の多くの学問的な歩みがこの問題につながり得るので、特に価値が生じると思われる観点に絞っていききたい。それは地理学の問題系に暗に存在していたり、個人について新たな知識をもたらす可能性があったりするものである。主体(sujet)というプリズム<sup>1)</sup>の問題である。

哲学的思想において古く繰り返されてきた考え方では、主体を無視できない争点としたのは特に近代——ギリシャ＝ローマおよびキリスト教文明を出自とする複雑で多様な運動——である。実際のところ、

主体の概念に与えられた意味が何であれ、それを中心的なもののみなしたり、あるいは回避しようとしたり、さらには反論しようとしたりしても、主体の概念は思想やアイデンティティ、道徳や法の原則についての多くの議論を構成してきた。19世紀から、人文・社会科学が頭角を現したとき、その認識論はこれらの議論を反映していた。部分的にはこの学問の進歩によって、特に科学万能主義や唯物論、現象学、そしてより最近では構造主義から発した思想の動きに直面して、この認識論はまた活弁になった。この概念がたとえ哲学の進歩によってそれほど固定化されなかったとしても、現代の個人主義と向き合う社会・人文科学においてそういった含意を負っていることは、この概念に避けがたいアクチュアリティをもたらしている。

こうして、個人についての見方としての主体の問題は、社会・人文科学を貫いている。非常に一般的な言い方では、その問題は個人が自分の置かれた状況から得られる認識に、またその判断や振る舞いに影響力を持つ規定に対する自由あるいは自律の割合に帰するといえる。地理学者にとっては、この規定が社会によるものであると同様に物理的なものでありうることや、それが決定論と可能論に関してすでに築かれてきた多様な立場を逃れられないことは明らかである。しかし主体の問題は、問いをそれほ

\* ポー・アドゥール大学 地理学・地域整備学 教授

\*\* ポー・アドゥール大学 地理学 准教授

\*\*\* CNRS 研究員、ポー・アドゥール大学 社会空間領域研究所 所長

\*\*\*\* 恵泉女学園大学 人文学部歴史文化学科 准教授

ど限定せずに個人への考慮に関連付けると、地理学的な関心をたわめるようになる。主体とはまずは固有の規定について省察し、行動の方向性を変えるためにその省察を利用する個人であるので、個人の次元はある。しかし、主体は規定やそれを乗り越える条件を与える社会から離れては理解され得ないので、その次元は個人的なだけではない。そのうえ、(そしてそれがまさに個人のある特定の意味に対してもう一步距離をおくことなのだが)主体というものは、時代と人生の流れにおいて自身が行動とその連関に与える一貫性の中でしか理解され得ないのである。

このようにいくらか明確化したのが、我々の意図、目的、行程を描くために必要なことは、アприオリに主体の詳細な定義を満たすという欲求にも、結論が導かれ、応用されるような操作的な概念をそこからつくり出すことにも発していない。逆に、主体の問題をはっきりと俎上に載せることで、我々はそこから地理学的思想が「加工している」ような付属物や隣接地を開拓することを望んでいる。我々が関心を持っているのは、ここその理論の役に立つような定義の中に主体を閉じ込めるのではなく、反対に、地理学の歩みの中で、主体の問題がどのように価値の付与をもたらしうるのかを見ていくことである。そのために、そうしがちな仕方を越えて、我々は特定の理論的な承認を得たものに限定された概念から始めることは控えた。

結果として、我々は断固として地理学から出発してこの問題に取り組むことを選んだ。しばしば行われるような、より正当性を持っている、あるいは正当化しやすいと判断される他のディシプリンから引き出された概念を、地理学で用いるのによい仕方に限定して自分たちのところに持ち込もうということではない。また数世紀にわたる哲学的・認識論的議論を濫用的にステレオタイプ化するものでもない。それでは主体についての地理学的な観点の可能性をアприオリに過小評価する可能性がある。確かに、その見方は主体のみに問題を絞り込むように見えるかもしれないが、地理学が他のディシプリンに確実に従属していて、その固有の貢献は強調する価値がないと思わせることはない。だからこそ我々は地理学への参照に絞り込んだ。我々は、このディシプリンの中であってさえ、我々が提起しようとしている主題を汲みつくすには程遠いと自覚している。こうしたことを出発点として、我々は多かれ少なかれ地理学的な議論を代表するものを用い、そのうえで他のディシプリンが同じ関心を共有する限り部分的に少しそこに侵食することにする。

では地理学において人が直面し、我々がここで考慮しなければならない、主体の問題の大きな争点は何であろうか。地理学的に主体にどう取り組むのか。この試みから得られる結果はどのようなものだろうか。書かれた時代の中で、またテキストの厚みを通じて、どのように、またどのような条件を持って、この個人の次元(あるいは個人についての見方)を考察するのだろうか。こうしたことが、我々が順番に取り組んでいく課題である。

## 主体のプリズムを通したいくつかの大きな地理学的争点

あまり明瞭ではないながら、主体の問題は地理学を様々な仕方で動かしている。すでに、世界を観察し、説明づけようとする科学者として、地理学者自身の歩み自体が関連させられている。研究される対象 (objet) を外部化する関係において、上からの見方、考える存在の見方に特権性を与えてきたという意味で、地理学者がしばしばもっともデカルト主義的な歩みを採用してきたことは本当である。実証主義が地理学におけるこの態度をどのくらい強化してきたかについて改めて論じることは無意味だろう。

他方で、主体の問い直しの一つがまさに地理学との接触にあって重要な認識論的变化を受けてきたことは強調しなければならない。カントは、誇張なしに、世界との関係における認識する主体 (sujet-connaissant) の役割に価値を置いていた。こうして、知性の活動を意識しながら、フンボルトやヴィダル・ラ・ブラーシュのように、概念や知識から構成された見方と同様に、人間と自然の関係の中にある (地理学者本人にとってと同じくらい彼が調査している人々にとっての) 自由と不確定性の役割を考慮に入れようと努めた地理学者もいる。カント哲学から派生したこの伝統において、特にデュアムとポワンカレのコンヴェンションナリズムを経由して、主体は、地理学的な議論の可能性を越えて、個人についての研究に取り組む仕方としてよりは、認識や人間の行動の条件として現れてきた (Berdoulay, 2008)。それはむしろ、生活様式や、地域あるいは国、民族、住居の分類などと同様、地理学者の大部分がそのような、特権的な人間グループに帰される概念である。

それは、地理学的な理論に押し流された人間の理解について、疑念が高まるのを妨げるものではなかった。それは特に、他の人文・社会科学と同様

に地理学において、最初のモデル化が対象となった議論からそうであった。こうして、理論や方法に隠れた、あるいはそれらによって明らかに引き合いに出された「人間のモデル」について省察が始まった (Claval, 1984: 233-255)。それは部分的には、自我の構成あるいは主体の認識についての地理学的な次元を考慮に入れる傾向の高まりになって現れた (Ley et Samuels, 1978; Sack, 1997; Lazzarotti, 2006; Pile, 1993, 2008)。主体はこうして、意図、自意識、感情や情動を通じて、地理学において活用された。

何人かの地理学者が現象学の中に求めた着想は、つまり志向性についてのその関心から来ている (Dardel, 1952; Buttimer, 1976; Relph, 1976)。主体は、つまり思考する行為の中で明確になる意識は、生じ発展するために、他者、つまり他者の視線を必要としている。そのため、この見方から——そしてそれがその関心なのだが——主観性は間主観性なくして存在しえない。現象学的な方向性に特徴づけられた地理学的な研究は、そのためにそれ自体、間主観性の角度から考察された、この主観性がもたらすものを探求している。異なる特性を持ちながらも彼らは、体験や他者との関係と同様に、行為に光を当てる豊富な仕方でも観察された、態度や表象、感覚対象、さらには情動に専念してきた (Werlen, 1993; Bureau, 2001; Hoyaux, 2006; Tuan 2006)。主観性は個別の文脈で理解されるが、与えられた状況を越える個人の一貫性は理解されないか、ほとんど理解されない。ところが、個人を主体にするのはまさにこの一貫性なのである。個々人において成果になりつつあるこの主観性にはそこで確かに到達しているものの、それは一般的なもの、間主観的なものの中に囚われている。結果として、これらの研究は多かれ少なかれ領域化された人間集団に特化する傾向にあり、主体への関心は個人からつながりを解かれて戻ってくることになる。個人としての主体は見失われる。それはまたもや一般化された主観性へと弱められる。主に主体が感じていることに取り組むと、しばしば主体は能動的であるよりも受動的であることにおいて理解されてしまう。

すでに指摘されているように (Laplace-Tretyure et Schmidt di Friedberg, 2009)、個人をより一般的なカテゴリに包摂する、粘り強い似通った偏向が地理学者の間にもあり、領域性の分析を集合的あるいは集団の動態性の分析に制限して納得している。社会経済的な構造や規定性の役割を重視しすぎないようにするために、地理学者は確かに個人を価

値づけようとしている。彼らは社会・人文科学の近年の研究の中では特にこの考え方を覚えつつある。アクターやエージェントという用語は、ある面ではこの問題のためにしばしば持ちだされている。これらの概念が規定に直面した個人のイニシアティブの役割に言及することへの関心を十分に呼び起こすなら、それらは領域の配置や再配置を説明するために操作的だとみなされる包括的なカテゴリに個人を組み入れていることになる。こうして人は機能的あるいは空間的基調を持った古典的なカテゴリ——社会職業的あるいは政治的カテゴリ、社会階級、性別のあるジェンダー、すべての種類の領域、エスニックあるいは移民のコミュニティ、周辺化された集団など——に再び出会う。しかし、それでは個人は社会的な次元、そうでなければ間主観的な次元によってしかとらえられないかのようなのである。主体であることの力は、そのレベルでは地理学的な意義を持ちえないかのようなのである。

個人への関心の的確さがそれでも認められるこうした研究の多くには、それもとて説明ではポスト構造主義を宣言していても、構造に割り当てられた重要性の負荷がかかっている。ブルデュエ的な伝統はそこに無関係ではない。なぜなら社会地理学を標榜する地理学者の多くはそこから着想を得ているからである。しかし、デュベ (1994: 13) によって、ひとはブルデュエの著作が「非常に強いシステムの中の主体というフィクション」を提供したに過ぎないことを知っている。フランスの社会学者は、確かに社会的規範を内面化し、その行動がそうして得られた (見るべき、感じるべき、行動すべき) 配分の実現に帰結する、受動的なアクターを参照している。そのハビトゥスという思想は個人の能動的な役割を無視させ、それを周辺的な、さらには現実味のない何かに追いやってしまう。しかし、社会学の中でさえ、このアプローチは攻撃されている。それはこのアプローチが導いていく人間についての還元主義的な概念形成のためである (Alexander, 2000; Entrikin, 2001)。中でも特に、ハビトゥスという概念は、個人にとって一つの実践から別の実践へ移させる配分の全くの一貫性というのはめったにないことから攻撃されている。逆に、調査によって社会生活のコンテクストの複数性は実践の複数性に対応しており、個人間だけでなく、個人の内部においてもそうであることが明らかになっている。個人において構成されている配分の複数性は広がっており、それは行動のコンテクストによるのではない (Lahire, 1998)。この視角においては、個人の省察性——個人を主体

にするのに貢献するもの——は、社会生活においてほぼ一貫して、それ自体が変わりやすいコンテクストに従って行わなければならない様々な調整のために働くよう、呼び起されていることになる。

もし社会学者にとって社会的なものが集団の段階よりも個人の段階において立ち現われうらなら、それが個人の研究の次元を無視しないようにしようとする地理学者の意思を補強することは明らかである。さらには、個人を性格付ける空間性の研究が明らかに増加していることから（Lussault, 2000; Lévy et Lussault, 2000; Stock, 2004; Hoyaux, 2006; Lazzarotti, 2006）、「個人—アクター」を地理学的な分析の軸にすることもできるだろう。しかし、個人はどの程度効果的に主体として考えられているのだろうか。その難しさは現実には集団における個人の希釈度の作用によるものだけではなく、主体についての理解自体によるものでもある。主体の概念は疑念なく「自我の純粋で自由な意識」に戻ってしまうと危惧する人々もいるからである。それは社会地理学の関心を主体の概念から取り除く（Di Méo et Buléon, 2005:28）。あるいは「人間の絶対的な至上性」（Lussault, 2000:12）、さらには「超越論的な主体の実体」（Lussault, 2007:165）に戻ってしまうと危惧する人々もいる。実際のところそこでは、強く定義されるか、ある哲学的な流れを含んだ主体の概念の特殊な意味しか問題になっていない。他方で、至上性と透明性といった属性を与える古い考えを完全に拒否してこの概念を考える仕方が哲学にはしっかり存在している（Descombes, 2004）。それ自体多様で、引き裂かれていて、不透明なものとして主体を性格付けることは、社会・人文科学の専門家を驚かせるものではない。なぜなら、そこに光を当てることに貢献したのはまさにこの科学だからだ。しかしこの性格付けは、教条主義的な決定論に陥らない限り、個人が願い求める省察性や自律性を考察することを禁じはしない。彼らの実践方法の研究は地理学にも関心があるものだ。なぜなら、地理学にとって争点は、主体が必然的に位置づけられているところで主体に取り組むことだからだ。

主体という考え自体を追い求めることを拒否するという仕方では、事は全く異なってくる。それを信じる人々にとっては、主体は無用な考えであり、幻想でさえある。ポスト構造主義やポスト近代主義の動きは、確かに近代的主体を批判した。近代的主体はそこでは至上の存在で合理的で、西洋の貴族やブルジョワと奇妙に似通っており、男性で、中くらいの年齢で、既に述べたより複雑なものの見方を利す

ようなものであった。彼らは主体の概念を刷新して分析の基軸に据えようとはせず、時には（ラカン主義の）精神分析的な厳密な定義で満足してしまい、主体にのしかかっている、さらには主体が保持していると考えうる自律や自由の幅を現実的根拠のないものにする多様な権力や規定に固執することを選んで（Gregory, 1981, 1997; Thrift, 1983）。人がミシェル・フーコーの研究から刺激を受けるのはこの意味においてであるが、フーコーの作品は個人が権力に対峙する抵抗のために、より現実的根拠を持った形で主体の着想に扉をわずかに開いているのである。主体の問題がはつきりと持ち上がる時、ひとは試みられたものの結論をもたらさなかった著名な見方のような、利用できる理論的枠組みにその問いが当てはまりうると考える（Pile et Thrift, 1995）。そこから起こるのは、またもポストモダニストの関心のために再定義された社会的カテゴリー、包括的なアクターへの脱線である。近年のブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論へのはつきりとした関心は、表象によらない、ないことで済ます手続きのために、さらに主体への関心をそらした（Thrift, 2007）。

主体の問題はこうして持続している。それはとりわけ、あらゆる立ち退きの試みに抵抗することの中に顕著である。それはこの問いが、志向性の影響、省察の実践、自律性や自発性の能力、創造性と物質性に対する価値観の関係のような、個人とその環境の関係に関連した多様な争点と突き合わせながら、機能しているということなのだ。人文・社会科学を横断しているこれらの争点は、地理学が主体という概念に取り組むことに関心を持っているかをわずかでも説明すれば、そこから適切な見方を受け取るのである。

## 場所の資料を見いだす方法

多くの地理学者にとって主体として個人を考える難しさは、特に彼らが地理学の社会的次元の表明に焦点を当てているときには、一般に参照される主要なディシプリンである社会学にみられるのと同じバイアスから来ている。一方の主体と、他方の社会的なもの、あるいはその単純な反映とされる空間との間の理論化において確立されている、事実の分離が問題である。ギデンズのような、「エージェント」の時空間における調整に関心を持つ社会学者がいると、そこから着想を得た構造主義の地理学者が社会

的なものの圏域を形にしようとして、主体への独自の持続可能なアプローチには到達しなかったこともある (Gregory, 1981; Pred, 1986)。ではどのようにして、より完全に地理学的な仕方ですれに取り組みばよいのだろうか。

場所 (lieu) の概念が有効になりうるのはそこである。それを不可分に主体の概念と結びつけられていると考えると、逆にその適切な空間性を保持しながら、個人の形成における自律性や省察性の役割に重要性を見出すことが可能になる (Berdoulay et Entrikin, 1998)。この考えは、地理学的な関心との関連で展開されてきたハイデガー主義の伝統というある種の見方に支えられてきた (Dardel, 1952; Berque, 1996; Casey, 2001)。住むことというテーマはそこで最もよく知られた例証の一つだが、コーラ (chôra)、存在論的な環境 (milieu) についての省察もまた、そのアプローチが非常によく表れたものである (Berque, 2000)。この主体と場所の親密な関係は、ハイデガーの着想にとどまるものではなく、さらに切り離されてきており、固定された何かにとどまるものでもない。それはその流動性に関連して非常に展開しており、変動のさなかにあるとさえいえる (Knafou, 1998; Lazzarotti, 2004; Stock, 2006; Miaux, 2008; Fricau et Laplace-Treytoure, 2009)。

他者への貢献が考察の対象となる主体にとって、場所は関係を作り、個人を集会的なものに、またその逆へと行き来することを可能にする (Turco, 2001)。しかしこの考えにおいては、主体という視角が集団の主観性に薄められることがないように、個人が世界や自分自身に対して確立した距離を保ちつつ、個人を把握するように注意しなければならない。そこに主体形成に伴う省察性の源がある。主体は自意識にとどまるものではなく、個人が、象徴的であれ物理的であれ、その環境との間に築いた距離を置いた関係の中で定義されるものである。主体への地理学的アプローチは、そのために物質性の扉の前で立ち止まる必要がない。さらに言えば逆に、それが正当性を拡大するのはこの物質的次元なのだ。

主体の形成に関する場所の重要性を際立たせるには、それを極端な形、すなわち追放された状態に身を置くこと (exil) で検討することが可能性としてある。それは主体が受け入れの地と密接な関係を築くことが可能である一方、それでも自分のものとする場所の外にいる事例である。離れたことが強制であれ、自分の意志によるアプローチであれ、愛着と別離の間で距離を置くことが主体の成長において中心的な役割を果たすような関係を意味する。追放さ

れた状態についての文学はこのテーマを豊富に展開している。そこでは緊張の問題、私と他者、アイデンティティ化の拒否と追求、こことそこ、過去と未来、逃避と抵抗、理想と無力の間の緊張の問題が圧倒している。アルベール・カミュの著作には、この種の経験の有名であると同様に心を動かされる物語がある。その一つは主体から場所への関係の特徴づける答えのない問いを提起しさえする。『追放と王国』では、ヨナは倒れこみ、数日前から絵をかくつもりだった白いキャンパスは裏返してあり、その真ん中に彼は「実に細かい文字で、やっと判読できる一語を書き残していた。が、その言葉は、solitaire (孤独) と読んだらいいのか、solidaire (連帯) と読んだらいいのか、わからなかった」 (Camus, 1957: 139, [訳文は窪田による])。

自分の意志で追放された状態に身を置くことによって、多くの作家は場所から距離を置く状態を開拓し、それによって自分を主体とみなし、小説的であれ詩的であれ、それを創造に必要なものとする。彼らにとって創造性が生まれるのはその対価においてなのだ。個人が実践できる、場所—主体に距離を置く行為は、このように創造の手段として現れてくるが、同時に自己と世界の理解の方法としても現れてくる。個人が「複数」であることは、主体として彼が世界との間に確立し、彼にとって場所が何であるかにつながる関係の中で作り出される能力を何も減じはしない。だからこそ、この視角においては、主体と場所の共同構築 (coconstruction) があるのを見ることができるのだ。まただからこそ、主体が「分裂して」おり、人生を通じて変化するという確証を持つことは、性格が複数で変わりやすいものである場所、あるいは多数の場所へと帰するのだ。人生譚はこの現象をよく考慮している。

方法について議論してきた社会学者や人類学者においてほど、物語は地理学者には用いられていない。人生譚は、個人と、その個人が自分を表現する仕方と、その個人がそこで生きた文脈の間関係を明らかにすることを可能にし、単なるデータ収集の方法である以上のものとなる。主体が自分でそうであると認めるようなより複雑な一人の主体に、状況によって違う、いつも問題含みの一貫性を持たせることを越えて、人生譚は——とりわけ身の上を語る人物が人生の異なる段階が展開されたコンテクストとそれを認識する仕方を強調するなら——個別の状況に直面した時に、その人物がどのように自らの文化や過去の経験で武装しながら起こっている状況から距離をとり、彼によりふさわしい道に入り込みえ

たかを知ることができる。そのうえ、一人の個人が人生を通してなくてはならないすべての決断について見通しを持つことは、主体にアイデンティティを付与する一貫性と特異性を浮かび上がらせることを可能にする。そのアイデンティティは自分がその構築に関与した場所との関係で意味を持つのである (Arnauld de Sartre, 2006)。

自分を追放された状態にすることに制限がある状況のためによりはっきりと示される緊張は、人生の物語という点で違った次元を持っている。そこでは主体と場所の相互の構築がみられるのだ。人生を通じた多数の経験によって、異なる、さらには矛盾した行動基準を持っているために、彼にとって意味を持つことを表明する振付全体の中でその複数の経験がまるで両立していたかのようにする限り、「複数の人間」が主体となる。事実、緊張は主体という視点において文化的活動の特性とみられていた (Dumont, 1968)。主体は事実、引き継がれてきた利用可能な文化が、根本的なものであれ普遍的なものであれ、彼にとって順応し、変更し、反抗し、さらにはそこから新しいものをつくり出す規範や手段のように提示されることとの関係において、省察的な仕方で構成されている。風景や実践に刻み込まれて、文化が保持する価値はこの地理学的に土台となる緊張に組み込まれる。だから文化地理学はこれほどまでに自由を問題にしており、主体は自身を自覚し、自身を構築しようとするときに自由を動員するのだ (Berdoulay, 1999)。

普遍的なものとの関係をよりよく考察することを可能にするのは、この主体の土台となる緊張である。この非常に論争的なテーマは、実際には支配的な人々の利益でしかないような普遍の存在という近代主義的な信念をもたらすと糾弾され、主体の概念そのものの資格を剥奪するためにしばしば用いられてきた。しかし、たとえそのようなイデオロギー的な操作をしているとしても、そしてすべての場所の特異性を認識していたとしても、主体の構築における普遍が作り出す地平にそれほど目をつぶってはられない。無理に性格付けるなら、少し別のディシプリンの文脈で書くことができたものがあり、ここでは主体をこのように定義していた。「普遍化する「自己の外にあること」と個別化する「自己のためのこと」との間、また時空間の方向性を持たない一般性と今ここでという指標を持つ局地化との間、生物学や精神の個別性を持たない力の混淆と人間の存在状態の個別化された形態との間、集合的規定と(…)あらゆる社会的な非難に溶け込まない取り澄ました

態度という野心の関係を緊張させ、活動させる過程」(Delory-Monberger, 2004: 75)。この引用にある時間性の重要さは、緊張が主体を所与となし、主体は相互作用する文脈に応じて現れ、進化すると強調することを可能にする。場所を性格付け、普遍／個別の緊張がそこで展開するあわいには、完全に主体の発現と進化の性質がある (Entrikin, 1991; Tuan, 1996)。均衡は不安定で到達が難しい。環境との同一化、間主観性、主体の消失が高い価値を持つ日本についてベルクが強調しているように、主体への適切な省察性を養うことは根本問題のままである (Berque, 1986: 270-282)。また主体への外的な力に服従するが、世界において行動する主体のための道具でもある、身体の本質的な役割が現れるのはこの緊張によるのだ (Seaman, 1980; Laplace-Treytore, 2007)。主体にとっての気がかりは、こうしてそのすべての身体性ととも個人に帰される。

要するに、主体と場所の共同構築はそれを現出させる緊張を含むが、同時にそのうつろいやさきやもろさを強調する。ところがその共同構築は具体的な結果を伴っており、我々は行動に結びつく方法論的・論理的争点を持ってそれに取り組むことができる。

## 緊張状態の場所

既にみたように、(主体自身や場所の)変化という争点が重要であるだけに主体の問題はますますはっきりしてくる。そのため、ローカル[局所]の整備と開発の文脈においてそうであるように、変化が断固とした仕方で構想されればすぐに、主体の意味するところは際立った奥行きを持つてくる (Sénécal et Bouvier, 2001)。どのような場面において、またどのようにして、主体は場所を形成する必要の中で召喚されるのだろうか。主体と場所の相互の緊張がある中でどのような倫理的争点が提示されるのか、またどのような注意が払われるべきなのか。持続可能な開発を目指す今日の意志の中で、複数の国の専門家の代表が地理学を想起させたので、地理学が特にかかわってくることははっきりしている (たとえば Wilbanks, 1994; Miossec et al., 2004)。このディシプリンに突き付けられた課題は数多いが、それらは避けることのできない倫理的要素を持っている。それほど持続可能性に好意的な行動様式は、実践や昔は考えられたことがないことにかかっているのだ (Berdoulay et Soubeyran, 2000)。

持続可能な開発は、確かに異なる主体の概念化が

表明される実験室を構成している。個人の自由と環境の間の緊張、習慣的な行動と変化の間の緊張、その場所の規定の重みと自発性の能力の間の緊張は、そこで特に力を持って現れる。実際、開発という概念はそれ自体、主体の概念の基部にあるものと比しうる緊張を持っている。語源的な視点からは、それは「展開し、広げる行動、それ自体に巻きとられること」という意味である (Rey, 1991: 1065)。我々がここまで展開してきた主体へのアプローチに照らし合わせて考えるなら、開発はつまり主体形成の過程と比しうる過程に帰するものである。個人をそれ自体から、またそれが自由に活動するのを妨げる多様な決定論から脱中心化することこそが重要であり、それによって自意識や世界における自らの位置を考慮しながら個人を別の方向に持っていくことができる。持続可能な開発は、ふるまいを変えることを模索しながら、何よりもまず、個人の行動の多様化が環境に及ぼしうる結果を考慮することを意味する。つまり、この開発のアプローチは関係する人々の側に自らの実践についてある種の省察をさせるのだ (Pierron, 2009)。

しかし、個人的あるいは集合的行動の環境への影響を考慮することと関連した主体形成の過程は、その試みの非常な複雑さを表出させる。なぜならその様相が複雑であるからだ。確かにこの過程は——しばしば採用される表現を用いるなら——「主体の発現を促す」ものである。他方、このように世界における自らの位置とそのインパクトに気付くことは、(レヴィナス (1995) によれば他者の顔の出現のような) ある他者の形態との衝突と引き換えにのみ可能になる。それはすでに取り上げたような場所の問題に帰される。開発という語の語源論がそう促すように、気づくことは主体が生じることを、個人が所有する可能性の一部を表出しうることを要求する (Scheibe, 2004)。だからこそ環境教育の争点は決定的なのである。「意識化させること」のような指令のもとで実践され、この教育は持続可能な開発の文脈において、まだあまりにもわずかしら理論化されていないままである (Sorrentino, 2001; Trayber et Da Costa, 2001)。それでも、過去の経験を分析すると、20世紀前半のスペインにおける有名な自由教育学院運動と同様に、環境と教育と主体形成は、地理学的な観点から密接な関係を保っていると強く感じる (Gómez Mendoza et Ortega Cantero, 1996)。であるなら挑戦すべきことは、主体の自身と世界に対する働きかけを犠牲にする形で個人の操作が始まるのはどこなのかを知ることである。

そのためには変化を引き起こすことを決める人々の目的を考察しなければならない。ところが、しばしば普遍への参照が現れるのはそこなのである。たとえば変化の正当化は個別の社会グループのために必要なものとして提示される。実際のところ、そのような行動を正当化させるのは、公共の利益だとか、地球の余命とか、他の一般的に主張される価値といった、普遍の名の下においてなのだ。普遍的なものは、近代の言説において、特にもっともよく広まっている形態である大きな物語 (Lyotard, 1979) においては、特権的な地位を占めていると知られている。しかし、普遍的なものの定義の多くは、それが発信された文脈に関連していることも知られている。開発のための行為が個人主義的な、あるいは純粹にローカルな再中心化を避けようとし、普遍的なものを特に受け入れることに好意的であろうとするときから (Rossi, 2000; Mancebo, 2006)、それはカリュプディスからスキラ<sup>2)</sup>へ、個人的な関心から公共の利益という常に状況主義的な見方へと変化すると非難される。主体が求められるのはこのような緊張であり、開発のための行為を再度位置づけることを覚えなくてはならない。住民によって求められる変化と参加している専門家による社会的なものの操作との間に常に引かれた境界が乗り越えられないようにするには、その緊張に意識的でなければならない (Adams, 2001)。

確かに、ある種の普遍主義からの離脱は、開発、特に持続可能な開発の理論の進歩にはっきりと表れている。特に第二次大戦直後から、専門家によって決められる一般的な利益に根差し、多数の個人に押し付けられてきた後に、整備と開発はローカルに転換するようになってきた。そこでは、変化をもたらす社会の多様な力の中の錬金術が——特に参加によって——生み出されなければならない。年月が経つごとに、ローカルの開発はこうしてより人々、計画化の段階における人々の意志や役割に開かれた関心となった。人は自分の個人的あるいは集合的な生活条件を把握しようとする自律的で能動的な主体ほどには受動的な個人を気にしなくなった。しかし、レトリックに満ち、熱望を持った計画に強いこの門戸開放が、ローカルの開発を理解したり、有利にしたりするために動員しうる行動理論やモデルの根本的な変化を起こすことは相対的にあまりないということに気づかざるを得ない。

一方が実は他方の逆である二つの岩礁は、この開発行為における主体を考慮する困難をよく表している。一方では、素朴な「行動主義」が計画に非常に浸

透している。アクターが変化すべきだというふうに関心を持てば変化が起きると考えることが問題なのだ。新しいゲームのルール決定、文脈の変化は、しばしば変化を引き起こす最もよい解決法だと考えられている。個人の関心の発掘はその主な原動力だと考えられているため、行為が目指すのは新しい可能性の創造、そしてその可能性の周囲とのコミュニケーションである。しかし他方で、それらの行為が失敗にぶつくと、責任はしばしば事なかれ主義と糾弾される社会の側における変化の不可能性に帰される。なので人は、これこれの社会において、既に経験したこと以外のものは望むことも、さらには想像することもできない、文化と習慣に囚われた住民によるハビトゥス（あるいは習慣的行動）のために、変化は不可能なのだとしてすぐに考えてしまう。この文化的決定論は、弱まったためしがなく、開発行為の失敗を、変化を目指すべき社会の無能力の結果として読み直そうとする。

二つのケースにおいて、原因となっているのはおそらく、普遍的なものただ一つの受容という思想である。だからこそ、社会科学の研究が示してきたことにもかかわらず、たった一つの原則が計画をまさに座礁させる個人を行動させると考えるのである。まただからこそ、伝統/近代（あるいは北/南）という二分法が、このような省略が可能だという開発主体の認識を作り続けるのである。この二分法は、それが伝統的（あるいは南の）といわれる社会の多様性と近代的（あるいは北の）とみなされる社会の多様性を否定しているということにおいて、人文・社会科学から十分に批判されている。

人はこのアプローチが、手続き、技術、診断、アクターの手の内の割り出し手法などの手段で多く実施されるのに気づくだろう。そのアプローチは特に、根底ではそれが反対する手続きの冷酷さを確実に思い起こさせる方法論的な装備に立脚している…。なぜなら、すべてのこのような技術は相対的に主体の経験にあまり敏感ではないか、少なくともほとんど主体を組み入れないからだ。ところが、変化というのは、既にみたように、個人が自身とは異なる何かにぶつかり、またこの衝突が実践の継続に根差した変化を望む意志を生み出すということでは不可能ではないのだ。結局のところ、主体を組み入れる行為への鍵はおそらく、他者への認識において、規範への服従を求めるのとは異なる脱中心化においてなのだ。他者との衝突、究極の原則として他者の尊重のある倫理を持つことは、ここまで指摘された岩礁を避けることを可能にする道である。当然、そこに

は行為の成り行きは部分的に決定不能であることを受け入れることが含まれている。もし、実際、ひとが単一の利益を参照するのをやめ、それは開発行為に関係する個人々々によって同定されるものだと考えるなら、結果が必ずしも見通せず、政策の狙いとなる目的と結果の間に重大な乖離がありうることを受け入れなければならない(Soubeyran, 2007)。

しかしながら、それはローカルなるものと、それを通じてローカルに把握される個人が、開発の行程の要石として考えられなければならないということではない。実際、ポスト構造主義者の思想の進歩は、ローカルなるものと個人が、または第一の、あるいは上級の何かしらの真実を帯びているというアプローチを正当化することに帰するものではない。ローカルなるものは別の現実との関係で相対化されるものとしてしか存在しえない。この不幸にもまだ持続可能な開発の世界で非常に普及している一方向主義に (Brown et Purcell, 2005)、少なくとも二つの事由が対峙している。一つは、風呂水と一緒に赤子を流してはいけない〔小事にかかわりあって大事を失う〕ということだ！整備においては専門的な知が存在しており、しかも、たとえ変容、変更、方向転換、再調整が必要であるにせよ、それは長い間、有効であったのだということだ。ローカルであることに第一の真実を与える考えに反対する二つ目の理由は、地域性と全地球の規模の間には、網の目のようなものでも領域的なものでも、専門家による問題やねらいとなる解決の特定においてだけでなく、主体と場所の構築や生成においても介入してくる多様な空間的要素があるというものである (Manson, 2008)。単純な位置づけで定義された個人を越え、主体としてのそれに取り組む関心が生じるのは、まさに行程のこの部分ではないだろうか。

ローカルの開発は何より環境 (milieu) に帰される。環境は変化の目的というよりは、それによって開発がなされる手段である。この環境が何よりも、個人から主体へ移行する力から文化や想像世界が頼みにするものすべてを含んでいることを思い起こさなくてはならない。では主体のこの働きをどのように把握し、書き出すことができるだろうか。

## 叙述の場所

地理学は(研究の)記述方法の省察に急速に開かれてきており、場所は完全に知の構築物として扱われ、ゆえにまた省察性を帯びている。そこから出発する



ことで、地理学者はこうして研究対象としてとらえられた思想についての言説的側面に関心を持つことができただけでなく、自分たちの書き方を刷新させようとするところまでできるようになった (Berdoulay, 1997; Barnes et Duncan, 1992; Brosseau, 1997; Laplace-Treyture, 2003; Orain, 2009)。記述方法という考え方において、この「場所をもつ〔発生する〕<sup>3)</sup>主体」(Berdoulay, 1997) という挑戦、(方法的、理論的、認識論的な広い意味において) 学問的であり、倫理的でもある挑戦をどのように見つけていくことができるだろうか。存在し、行動する手法をここまで少し見てきた主体というものを、どのように記述したらよいか。別の次元の研究活動(フィールド、概念的・方法的「ブリコラージュ」、思想の組み立ての様式)が主体のうちに再認識することを可能にしたもの——場所との相互の再認識において構築された志向性、自律性、自発性、省察性、さらに部分的には創造性——の形跡をどのように維持したらよいのだろうか。どのようにして(ジョスランがJulien et Rosselin, 2009:139で説明したように)「その固有の構築物において主体によって果たされる役割」は記述できるのだろうか。

このあと続けていく話題の前置きとして、我々を元気づける視点からは、文章の領域において特殊性をなすことをあきらめない限りにおいて、人文科学のテキストは、再現可能性や普遍性(それはまたテキストの著者の脱個人性を目指す書き方を前提としている(Amorim, 1996))の形式を目指す形態を志向するのと同様に、その土地での経験に対して距離をとる形式を前提としていると言うことは、おそらく無駄ではないだろう。明確化するなら、(簡潔化するなら「厳密な」科学と文学の間の)人文科学の文章を位置づける連続体の長さは、まさに個人—主体の質が様々に提示されるような場を占めている可能性がある。我々の目的は、形式の一覧表を示すことではない。むしろ記述方法における意図を把握することが重要である。その意図とはおそらく複数の形式をとりうるし、地理学の文章における様々なジャンルやレベルを掘り下げるが、結局は、簡潔にするなら、主体の自由と呼ぶことができるもの、つまりひとが予測しないところにいる能力、我々の分析カテゴリーに抵抗する能力、多かれ少なかれ意味作用からあふれ出るものとして我々にそれを考えさせることを強いる能力を常に強調することになるか、あるいは生じさせることになるようなものである。

まずは実践や、整備や、世界への視点の多様性だ

けでなく、それがすべて、個人が場所との関係を編み上げる記録簿(Rodman, 1992)の多様性(感じられるものから理解できるものへ移行する連続体の長さ)を伴うという事実もまた意味する、主体と場所の多声性(multivocality)のようなものがあることを思い起こすことができる。主体と場所の共同構築は、個人的であると同時に集合的な経験の積み重ねの中でつくり出される。多様性と他者性はそれ自体最初の挑戦となるのだ。

次に、人文科学の中にあっても、ある記述姿勢への批判がどのように起きてきたのかをも思い起こすことができる。最初の障害は、厳密な科学の実証主義的な様式において、対象をそれ自体で表現するために著者を消すことであるようだ。近代の経験科学における著者の問題を分析する中で、スタンジェ(1991:4-5)は「著者とはだれか」という問いにあって、客観科学を称する真実性なるものは、「自らの真実を語る」性質を体現させるときには権威をなす話し手(テキストによって構築された叙述の源)のために、個としての著者を忘れさせるところに到達しなければならないことを示している。個人—主体への考慮は、「厳密な」科学、同時に人文科学における文章の最もアカデミックな形態を特徴づける、この非常に強い脱個人化に甘んじることができるのだろうか。フレモンは例えば次のように書いている。

「ディシプリンの科学化は、私には現代世界をよりよく理解するために不可欠に思える。しかし、私はまたそのように誠実に自分を引き受ける著者の地理学に訴えるものである。出版物の中のアカデミックな「我々」<sup>4)</sup>は、中立を装い、見せかけるもので、私には憎むべきものに思える。私は自分では一人称で書くことの方を好んでいる。それが私のたどってきた客観性であるからだ。」(1990:81)

他者に開かれておらず、まして(「他者性が対象の場所に話しかける」(Amorim, 1996:187)この研究者の「他者化」において)他者による働きかけをさせない、それ自体に閉じられた文章のスティグマ化から、独白への同化まで(Bourdieu et Wacquant, 1992)、歴史家や言語学者の同様の視点を経由して(Hartog, 2004; Rink, 2006)、(個別論文や博士論文のような)文章の記述様式やアカデミックな形式はかなり広く問い直されており、ベッカー(2004)が指摘するように、それらはリスクをとる記述方法の同義語であることはほとんどない。いずれにせよ、テキストにおける著者—地理学者—研究者とい

う主観性の扱いから、他者、特に他者—読者との関係の異なる形態が生じる。しかし、たとえテキストにおいて著者が不在であることはありえないと考えても、そのテキストの中で著者の存在様態がどのようなかを把握することは難しい。

難しさは特に、著者の側による上からの位置取り、その言葉に権威主義的あるいはドグマ的な強調を与えるようなものとそれほど思われずに、対象に批判的な距離を保つ必要性による。シヴィニオン(2007: 258)は、「土地と関係する個人的な経験」のような「私を取り除くこと」、あるいは「上からの位置取り」が我々の世界理解にいかにか損害を与え、いかにか研究者の謙虚さの欠如のしるしであるかを強調している。そのうえ、ギアツが言うように、研究者はますます「今や自分たち自身で語ることができ、そうしている主体に向き合って」(1986: 90)きている。反面、ジュルダンが言うように、すべてがまるで「社会科学の学問的方針が自律的な発言の生産を中心とする厳密な科学の記述様式との融合よりも、逆に、主体の無理なごまかしを、その学問が意味を持つためにはその無理が有効であるという意味において、際限なく目に見えるようにすることにあるという事実を公衆、社会が「強く感じていた」(Jurdant, 2006: 141-142)ように経過している。そのように、乗り越えられない地平を受け入れる文章には読者の側の潜在的な期待のようなものがあるようだ。

だから最新の『一般地理学』(Brunet, 1990-96)の発行と、1980年代と90年代の変わり目において地域の記述方法が刷新されたこととをめぐる論争において、記述方法の次元が重要な位置を占めたことは驚くことではない。それは二つの問題をめぐってはっきりと分かれて表れている。関係する広い公衆の問題と、テキストにおける暗示の度合いと形式を定義するのが難しい著者の問題である。議論がされる中で、「私」と著者—地理学者—研究者という地位の問題の記載は、風景を前にした感情、場所の記憶などの「情緒」を表現するかしないかという関心と混同される傾向にある。しかし、「自分の分を寄与する」ことが本当に問題なのだろうか。シヴィニオン(2007: 259)は「自己中心的な自己地理学の追及」に対して警戒している。またアモラン(1996: 74)は、研究者が主体性を客観化し、同様に他者(話題にしている人)を主観化する試みは、研究のテキストの望ましくない心理学化につながりうるとみている。アモランは「この心理学化は別のいわゆる透明性の形式、つまり著者の形態に根差している」と詳述し

ている(*Ibid.*: 74)。さらにはつまり、他者、すなわち話題にしている人に帰しようとしてきたような透明性が問題なのである。

では「土地にいる存在」の構成要素の一部をなす、この地理学者の「強く感じられたこと」にはどのような場が与えられるのだろうか。結局、地理学者の自己を書き込むこと、あるいは(叙述の場の)著者—研究者であるできるだけ多くの種類の人々と、その可能な組み合わせに求めることを促進することが問題なのだろうか。それぞれ対象に対して異なる距離から作用する複数の位置取り—著者、観察者、証言者など—を著者がとることができる(プロン社の)『人間の大地』叢書<sup>9)</sup>によって提示されたテキストのような方法で?そこでもまた、フレモンと彼の『アルジェリア』(1982)に帰されるだろう。そこで彼はある種の地方を再訪し、複数の叙述の状況の混合の中で、自由に構築され、脱構築される限りにおいて、特異な場所と個人—主体、また著者—主体を一致させる。ある種の複数の可能で補完的な叙述の場で作用するこの書き方の反響として、読者は能動的な読みの過程に入るように導かれる。現実につながる異なる声(道)をかかわるがわる、あるいは同時に取り入れて読みにかかわっていく。このような思い切った、自分をさらす書き方は、「読者が批判的な視点と合致するという仕方を持った読者の指向する幻想」(Dällenbach, 1997: 13)を問う一つの方法だと考えることができるだろう。それはいずれにせよ場所の感覚は記述—読みと同時に生じるという信念を示す。

要するに、主体の問題は、一方で「それを研究する研究者と同時に言説を語り生み出す主体がいるという事実を無視するか忘れた記述方法あるいは記述慣習を用い」(Amorim, 1996: 15)ないように促し、他方で対をなして、こちらもまた主体とみなされる読者のすべての経験を利用するように促す。こうして、アカデミックなスタイルに対抗して、『人間の大地』叢書は血肉化した言葉の表現を特権化しようとした。そのうえ、語りの形式によっており、その中心には他者や自身の他者性との出会い(Aurégan., 2001)における研究者によって生きられた証言がある。『人間の大地』(と象徴的なレヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』)を思い起こすことは、地理学が他の社会科学と同様に大地を描くという意志において文学と対話する、複雑で曖昧な関係を思い起こす方法である。

## 探し求める書き方

文学は(カステルの論文(2001)のタイトルを用いるなら)人文科学の実験室となりうるだろうか。『人間の大地』は、その2009年11月—12月の通信の中で、創設者のジャン・マロリーの声を通して、叢書の中で提示されたすべてのテキストの文学的地位を再確認し、その三つの軸を思い起こさせた。参加を表明すること、すべて「かほとんどすべて」を言うことによって証言すること、そして最後に——マロリーは「これが本質的だ」と強調している——「意図が書き方によって支持されていること」(Malaurie, 2009: 2)。人文科学のいくつかの著名なテキストは、その文学的質によって一時代を画しており、学問と文学が現実と異なる関係を持っているにせよ、それは対象につながる道においていくつかの境界線は多孔的であるということを示している。しかし、主体性という問いは問題となる形態のままである。こうして、レヴィ=ストロースにオマージュをささげながら、ノラ(2010: 6)は『悲しき熱帯』について次のように書いている。マロリーが書いていることと関係した幾分か曖昧さをなしにするのではなく、「古典のリストにある偉大な文体に頼ることは、コマンドゥール<sup>6)</sup>の調子やスケールをこの賢人の文学者に与えるために、個人的な経験を自由裁量から奪ってきた。言葉の恩恵を通じて、伝統の最上段からその声について語るかに見えたのは西洋だった」と。この主体性が占めえた場所は、シヴィニョン(2007: 251)の筆のもとではまた不確かであることが明らかにされる。「(…)一人の哲学者が書いたことを思い起こす。現実的なものはその外観の総合からなっていること、(…)博士論文や学問的なテキストの陰に隠れて、アカデミックな、あるいはその他の公式の論拠を構成するものの枠組みを越える経験に気づいた、より親密で、より個人的な別のテキストのための場所がある。」提起された問題はまさに、「フィールドの自分」から、学問的で常に反駁可能な真実についていうことを実際に目指そうとする意図への分節の問題である。ところが、フィールドの体験、こちらでは、それ自体では決して反駁可能ではないということをつけ加えることが試みられようとしている。では人文科学のテキストにおいてその地位はどのようでありうるのだろうか。

プロソー(1996)は文学との対話の姿勢を採用するように提案している。彼にとって、文学は何よりも地理学者の対象物を考察(再考)するための素材、小説が「探求する形態」(プロソーによる引用

1996: 63)だというミラン・クンデラのこの一節が刺激を与えるアプローチを体現するものである。実際は、たとえ地理学が文学と混同され得ないにせよ、二つのディシプリンは密接な関係を保っており、長い間考えられてきたよりも簡単に一致する(Chevalier, 1993; Brosseau, 1996; Bédard et Lahaie, 2008)。対話の姿勢をとれば、文学的对象が主体と場所の書き方の痕跡の上はどう置かれうるのかを垣間見ることができる。

こうして、我々はすでに主体と場所の多声性について触れてきた。テキストの側から見つけることができる反響は何だろうか。実際には、場所と主体が異なる表現からなることを考慮しえても、(とりわけ間テキスト性、つまり一つあるいはむしろ複数のテキストが別のテキストの中に存在する形態のもとでは(Maingueneau, 1996))事実、あらゆる意図をもって構成された他者性によって形成された、研究対象とそれを説明するテキストであることは変わらない。しかし、テキストの多声性について語ることは別のものを呼び起こしうる。テキスト構築戦略としてのポリフォニー<sup>7)</sup>である。これについて、クラング(1992)が行った批判的アプローチは、テキストの創造性の問題全般を残し、読者の役割については黙っている。著者および著者が話題にしている人々の声のみが考慮されており、それらは著者がその権威を維持しうる方法との関係によって検討されている。クラングにとって、極限では、発言の記録の複数性は、ほかの場所で別のかたちで再構成され、その人物の出自の文化資本によっていやおうなく特徴づけられた「著者の」権力をはぐらかすのに役立つ幻想を構成している。我々は逆に、テキストの多声性の概念は、ポリフォニーの思想が権力関係をただ再構成するテキストの戦略となるような表現の問題に帰されるべきではないと考えている。表現の多様な種類が問題の核をも構成し、思考の刷新の源になることを考慮しなければならない。アンリ・ルフェーブルは、その理論好きの傾向にもかかわらず、ピレネー山脈についての著作の執筆に熱中していた時はこの要求によく気づいていた(Entrikin et Berdoulay, 2005)。

ディシプリンのアイデンティティは言説の形態を動員する仕方に現われる(Berdoulay, 1988; Perrot et de la Soudière, 1994)。それが力や聴衆、社会的な正統性をひき出すのは部分的にはそこからである。ところが、他の人文科学と同様に地理学の書き方は、おそらくますます、他の言説との競争関係にある。こうして、サンジュアン(2008: 11)は自問

している。「しかし地理学者が同時代人に遠くにある土地について話すようなどこかが残っているだろうか。異国についての言説においてどこにその場所があるのだろうか。他方で新しい技術のおかげで視聴覚機器によって世界の果ての画像を直接見ることができるのだ。「空間化」や「学問の後退」といった概念に何を読み取ればよいのだろうか。」しかし、「ジャーナリストから距離を置きたいという正統的な願いは、たとえば、『21』誌の創刊号において指摘されたように、「アクチュアリティに関する10ページから30ページのルポルターージュ」が、深いところまでの調査や、一人称単数での書き方や、様式の混合や、心をとらえる読みや、世界における共通の(既成)概念との関係からずれた視点をひき出す仕方で進めている語りのジャーナリズムに力を与え、刷新させたものを動員するのを拒むことを意味するのだろうか。そんなはずはない。

そのうえ、地域の記述に関する討論の中で、ゴメス・メンドサとオルテガ・カンテロ(1988:96)は、むしろ多様な分野や談話資料を利用するよう促している。「詩人と語り手、旅行記録とジャーナリズム、すべてが地域についての記述が持つ様式を見つけることにつながり、それは抽象的な概念になりすぎないだけでなく、あまりに個人的で情緒的な演出でもない」。ここでは、重要なことに、問いは権威となる言葉を示すよりも、あらゆる手段をあきらめることなく世界に問いかけることができるような書き方の発明にかかわっている。読者への注意喚起(その関心、専門知識、好奇心)もまた議論の中心であり、我々を主体一場所を構成する組み合わせの理解へと開く可能性の表明として読者を追い求めるといふ考えへ導く。究極では、主体を重視するということは、読者を重視することでもあるのではないか。たとえ読書習慣を混迷させるとしても、テキストを、能動的な主体と感覚をつくり出す利害関係者と考えられる、著者と読者と他者(言説の対象)の間の相互的な含意を持った場所にするのではないか。全く違った形で、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ(1979=1903)の『フランス地理学総覧』は、その時代、確かに学識ある談話(地域の風俗を通じて)を独創的な書き方の経験の場所とすることができたが、分析の質や豊かな地理的想像力を駆使して、多様な「専門知識」に開かれた読みの経験の場所とすることもでき、さらにはフランスや地域的連関についての新しい言説に対する知的であると同時に情感的な研鑽の機会であることもできたのだ(Laplace-Treyture, 2008)。

個人を主体として理解するために至上性という考えを推し進めることは必要ではないと同時に、この分野よりもあの分野を動員することを選択する著者の能力を推し量りうる状態にあるためには、非常に力強い、その発言の統率者であるような主体としての地理学者の形態を追い求めることも必要ではない。そのために、エッセイへの希求が増加しているのは、自由と制限の間で、ますますオープンに批判されるある種のアカデミックな書き方(特に中立的で慎重な言い方において)を、却下される危険を冒さずに乗り越えさせる。こうして、プロソー(1996)、ビュロー(2001)、そしてロッシ(2001)またヴァニエ(2008)は、非常に違う例をいくつかとるためだけに、(時に強く慎重さを要求されるとしても)受容された個人的な言葉という考えに固執している。それは同時に、自分自身で、しかも主体とみなされた個人自体について考えることのできる読者に強く訴えかけようとするように考えられた個人的な言葉である。一般的な仕方では、エッセイの形式は新しいことが起こるようにそこにある(Brosseau, 1997)。主体一場所の組み合わせは、つまりこの書き方の分野に生じうる。エッセイは、読者を証人にしながら、読者を含みながら、論争をする。アモランが書いているように、「人文科学では、対象はテキストによって話されたり、経由されたりするだけではなく、対象がテキストである。説明し、解釈するためのテキストは、話す対象である」(Amorim, 1996: 127)。同じ仕方で、研究者によって生産されたテキストは、今度は他の主体—読者によって理解される対象である。エッセイは複数の視点を対話させ、強いフィードバック、個人としての著者に受け入れられたフィードバックを示し、能動的な読みの過程にかかわる読者自体を想定する。テキストが引き受けられる多声性は、この対話と、このポリフォニーの跡を残す発言形式なのである。

## 結論

部分的であっても、地理学において主体についての関心もたらすものに関するこの試論の最後に、いくつかの知見をひき出すことは可能である。それらはすべて主体の概念が我々の世界理解を深めるために付け加えられる価値があるということを確認することになるだろう。その価値は人間の条件についての地理学的問いを刷新させる視点や見方からなる。そのうえ気づかされるのは、主体の問題は地理

学的に取り組みられるとますます豊かであることがわかるということである。

主体を抽象的で合理的で至高の存在にするよりもむしろ、地理学は、身体性とともにもその存在と生成とを基礎づける場所をもって、それを具体性の中で理解することができている。主体と個人の概念を混同することはそれほど適切ではない。確かに個人に関心を持つことは主体への関心を正統化し、またその地理学的研究は利用することができる。しかし、主体は個人よりも大きな認識の射程を持った関心につながっている。より一般的な仕方では、主体は個人の概念を乗り越えるものに、人間存在がカテゴリーの中に閉じ込められるや否や意味を横溢することに帰されていく。その意味で、主体への関心は、個人との関係がそれほど拘束的ではない主体性への関心をも乗り越える。

主体の地理学はつまり、体系をなし、特に個人に集中する重要性を再認識する行程に付け加えられる価値をもたらしように向かうべき、意図と招請の総体に対応するものでありうる。この観点では、主体に関心を持つことは抽象的で非常に強い形態に基づいた普遍主義に戻る何かを意味しないことを思い出さなければならない。この点では、地理学的アプローチは防御策を提供する。最も重要な意図は、個人の言葉を普遍概念の中に失わせないことである。人々の生に迫りながらもその価値を実体化しないようにすることである。主体の発現に伴う距離化は、地理学者と同時にその仕事によって関連させられた人々にとっての事実である。

主体に関心を持つことは、それ自体の矛盾や分断があるにせよ、個人が環境との間で織りなす関係において、創造性や自律性、省察性の側に配慮する態度を見せることである。我々に耳を傾けさせ、さらには整備の枠組みで行動するよう促すのは、この思いがけない、偶発的な部分なのだ。自分の状況や自身の行動に対して抵抗して、しかし同時に、多様な次元で自身を取り巻く世界との関係と同様に環境との関係を構築し、主体は人がしばしばそう考えるよりも複雑で変化可能に見える。変化への行動の基礎をなすためのこの多次元の関係から始めることは、確実に成功の条件である。

主体の問題はそれを表現する仕方への問いをも発する。それは別の仕方を書くこと、場所の多声性を考慮すること、読者との対話を築くことを促す。地域の風俗、エッセイは、この「探し求めている」形態の性質を持っている。結局は、主体と場所の共同構築に関する学問的、倫理的、美的次元を結び付け

せるのは、まさに地理学的導入の利点である。

こうして、共和国の法<sup>8)</sup>が自由と責任をすべての市民に求める限り、従っている規定が何であれ、政治的・民主的行動について探求すべき新しい地理学視角が開かれる。こうして倫理学の命令は——ここまで見てきたように——地理学的次元が不可欠である主体に訴える。地理学的次元は個人が主体として負わなければならない別の緊張であると同時に、主体に地理学的に取り組むことへの関心を正統化するものである。

## 訳注

- 1) 「プリズム」はそれを通してみることによって、通常見えないものを見せるという意味でしばしば使われる表現とのこと(2014年11月17日著者による説明)。
- 2) いずれもギリシャ神話の怪物の名。どちらに行っても障壁があることを示す慣用表現。
- 3) 原語の *avoir lieu* (場所を持つ) は、通常「起こる」の意で用いられる熟語(英語で言えば *take place* にあたる)。
- 4) フランス語のアカデミックな文章では、意見を述べる際に一人称複数形を用いる。一人称単数は著者が前面に出ている印象となり、複数にすることが謙譲の表現だと考えられてきたことによる。本文のようにそれが客観的に見せる効果を持っていたこともある。
- 5) 1955年からフランスのブロン社によって出版されている人類学叢書。レヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』がその一冊として含まれている。
- 6) 植民地における農園監督。
- 7) 著者たちによれば、*multivocalité* と *polyphonie* は、ラテン語起源とギリシャ語起源の違いのみで、前者は人類学で、後者は文学で用いられてきた概念であり、指示内容にはあまり違いがないとのこと。
- 8) 民主主義、人権などを意味する表現だが、この表現を選んだところにフランス的共和主義を支持する著者たちの立場性も現れていると考えられる。

## 文献

- ADAMS, William M. (2001) *Green development. Environment and sustainability in the Third World*. New York, Routledge.
- AMORIM, Marilia (1996) *Dialogisme et altérité dans les sciences humaines*. Paris, L'Harmattan.
- ALEXANDER, Jeffrey C. (2000) *La réduction. Critique de Bourdieu*. Paris, Cerf.
- ARNAULD DE SARTRE, Xavier (2006) *Fronts pionniers d'Amazonie. Les dynamiques paysannes au Brésil*. Par-

- is, CNRS Éditions.
- AURÉGAN, Pierre (2001) *Des récits et des hommes*. Paris, Nathan/Plon.
- BARNES, Trevor J. et DUNCAN, James S. (dir.) (1992) *Writing Worlds*. New York, Routledge.
- BECKER, Howard S. (2004)[1986] *Écrire les sciences sociales*, Paris, Economica.
- BÉDARD, Mario et LAHAIE, Christine (dir.) (2008) Géographie et littérature. Numéro thématique des *Cahiers de géographie du Québec*, vol.52, no 147, p.391-572.
- BERDOULAY, Vincent (1988) *Des mots et des lieux. La dynamique du discours géographique*. Paris, CNRS Éditions.
- BERDOULAY, Vincent (1997) Lieu et espace public. *Cahiers de géographie du Québec*, vol.41, no.114, p.301-309.
- BERDOULAY, Vincent (1999) Géographie culturelle et liberté. Dans Jean-Robert Pitte et André-Louis Sanguin (dir.) *Géographie et liberté*. Paris, L'Harmattan, p.567-573.
- BERDOULAY, Vincent (2008) La formation de l'école française de géographie (1870-1914), 3<sup>e</sup> éd. avec un postscript, Paris, CTHS.
- BERDOULAY, Vincent et ENTRIKIN, J. Nicholas (1998) Lieu et sujet : Perspectives théoriques. *L'Espace géographique*, no 2, p.111-121.
- BERDOULAY, Vincent et SOUBEYRAN, Olivier (dir.) (2000) *Milieu, colonisation et développement durable*. Paris, L'Harmattan.
- BERQUE, Augustin (1986) *Le sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature*. Paris, Gallimard. (=篠田勝英訳『風土の日本 自然と文化の通態』筑摩書房(1988))
- BERQUE, Augustin (1996) *Être humains sur la terre*. Paris, Gallimard.
- BERQUE, Augustin (2000) *Écoumène*. Paris, Belin. (=中山元訳『風土学序説 文化を再び自然に、自然を再び文化に』筑摩書房(2002))
- BOURDIEU, Pierre et WACQUANT, Loïc J. D. (1992) *Réponses : pour une anthropologie réflexive*. Paris, Seuil.
- BROSSEAU, Marc (1996) *Des romans-géographes*. Paris, L'Harmattan.
- BROSSEAU, Marc (1997) Géographie, pratiques discursives et ambiance postmoderne. *Cahiers de géographie du Québec*, vol. 41, no 114, p.289-299.
- BROWN, John C. et PURCELL, Mark (2005) There's nothing inherent about scale: political ecology, the local trap, and the politics of development in the Brazilian Amazon. *Geoforum*, vol.36, no5, p.607-624
- BRUNET, Roger (dir.) (1990-96) *Géographie universelle*. Paris, Hachette-RECLUS
- BUREAU, Luc (2001) *L'idiosphère. De Babel au village universel*. Montréal, L'Hexagone.
- BUTTIMER, Anne (1976) Grasping the dynamism of the lifeworld. *Annals of the Association of American Geographers*, vol.66, no2, p.277-292. (=井上朋子訳「生活世界のダイナミズムの把握」千田稔編『地図のかなたに』地人書房(1981))
- CAMUS, Albert (1957) *L'exil et le royaume*. Paris, Gallimard. (=窪田啓作訳「追放と王国」『転落・追放と王国』新潮社2003文庫 pp.161-361)
- CASEY, Edward S. (2001) Between geography and philosophy: What does it mean to be in the place-world? *Annals of the Association of American Geographers*, vol.91, no4, p.683-693.
- CASTEL, Pierre-Henri (2001) La littérature, Laboratoire des sciences humaines? *Revue d'Histoire des Sciences Humaines*, vol.2, no5, p.3-9.
- CHEVALIER, Michel (dir.) (1993) *La littérature dans tous ses espaces*. Paris, CNRS Éditions.
- CLAVAL, Paul (dir.) (1984) *Géographie humaine et économique contemporaine*. Paris, Press universitaires de France.
- CRANG, Phil (1992) The politics of polyphony: reconfiguration in geographical authority. *Environment and Planning D: Society and Space*, no5, p.527-549.
- DÄLLENBACH, Lucien (1997) Mise en abyme. Dans *Dictionnaire des genres et notions littéraires*. Paris, Encyclopædia Universalis et Albin Michel, p.11-14.
- DARDEL, Éric (1952) *L'homme et la terre. Nature de la réalité géographique*. Paris, Presses universitaires de France.
- DELORY-MONBERGER, Catherine (2004) Le récit de vie ou la fabrique du sujet. Dans Jean-Yves Robin, Bénédicte de Maumigny-Garban et Michel Söetard (dir.) *Le récit biographique*, tome 1. Paris, L'Harmattan, p.61-78.
- DECOMBES, Vincent (2004) *Le complément de sujet*. Paris, Gallimard.
- DI MÉO, Guy et BUÉLON, Pascal (2005) *L'espace social. Lecture géographique des sociétés*. Paris, Armand Colin.
- DUBET, François (1994) *Sociologie de l'expérience*. Paris, Seuil.
- DUMONT, Fernand (1968) *Le lieu de l'homme*. Montréal, HMH.
- ENTRIKIN, J. Nicholas (1991) *The betweenness of place*. London, MacMilan.
- ENTRIKIN, J. Nicholas (2001) Hiding places. *Annals of the Association of American Geographers*, vol.91, no4, p.694-697.
- ENTRIKIN, J. Nicholas et BERDOULAY, Vincent (2005) The Pyrenees as place: Lefebvre as guide. *Progress in Human Geography*, vol.29, no2, p.129-147.
- FRÉMONT, Armand (1982) *Algérie – El Djazaïr. Carnets de guerre et de terrain d'un géographe*. Paris, Maspéro.
- FRÉMONT, Armand (1990) Vingt ans «d'espace vécu». Dans

- Antoine Billy et Renato Scariati (dir.) *L'humanisme en géographie*. Paris, Anthropos, p.13-22.
- FRICAU, Baptiste et LAPLACE-TREYTURE, Danièle (2009) Le piéton de Bordeaux : nouvelles pratiques de déplacement et de découverte en ville. *Géographie et cultures*, no70, p.21-36.
- GEERTZ, Clifford (1986) Diapositives anthropologiques. *Communications*, vol.43, p.71-90.
- GÓMEZ MENDOZA, Josefina et ORTEGA CANTERO, Nicolás (1988) L'approche régionale aujourd'hui. *Géopoint 88*, Avignon, Université d'Avignon – Groupe Dupont, p.95-97.
- GÓMEZ MENDOZA, Josefina et ORTEGA CANTERO, Nicolás (1996) Géographie et régénérationisme en Espagne (1875-1936). Dans Vincent Berdoulay et Hans J. A. Van Ginkel (dir.) *Geography and Professional practice*. Utrecht, Nederlandse Geografische Studies, p.111-123.
- GREGORY, Derek (1981) Human agency and human geography. *Transactions of the Institute of British Geographers*, no6, p.1-18.
- GREGORY, Derek (1997) Lacan and geography: the Production of Space revisited. Dans George Benko et Ulf. Strohmayer (dir.) *Space and social theory: interpreting modernity and postmodernity*. Oxford, Blackwell, p.203-231. (=大城直樹訳「ラカンと地理学——空間の生産再考——」『空間・社会・地理思想』14号 pp.103-123(2011))
- HARTOG, François (2004) Régime d'historicité. *Vox poetica*. [En ligne.] <http://www.vox-poetica.org/entretiens/hartog.html>
- HOYAUX, André-Frédéric (2006) Pragmatique phénoménologique des constructions territoriales et idéologiques dans les discours d'habitants. *L'Espace géographique*, no35, p.271-285.
- JULIEN, Marie-Pierre et ROSSELIN, Céline (dir.) (2009) *Les sujets contre les objets... tout contre*. Paris, CTHS.
- JURDANT, Baudoin (2006) *Écriture, réflexivité, scientificité. Sciences de la société*, no67, p.131-144.
- KNAFOU, Rémy (dir.) (1998) *La planète «nomade». Les mobilités géographiques aujourd'hui*. Paris, Belin.
- LAHIRE, Bernard (1998) *L'Homme pluriel. Les ressorts de l'action*. Paris, Nathan.
- LAPLACE-TREYTURE, Danièle (2003) La pertinencia de la noción de género para una historia mundial del pensamiento geográfico. Dans Vincent Berdoulay et Héctor Mendoza Vargas (dir.) *Unidad y diversidad del pensamiento geográfico en el mundo. Retos y perspectivas*. Mexico, UNAM/INEGI, p.47-56.
- LAPLACE-TREYTURE, Danièle (2007) Le paysage en pratiques. *Erra*, nos73-74, p.281-290.
- LAPLACE-TREYTURE, Danièle (2008) Du terrain dans le texte? Modalités d'existence et enjeux de l'expérience de terrain à travers l'exemple de l'écriture régionale.
- À travers l'espace de la méthode : les dimensions du terrain en géographie*, Arras (France), Colloque international. [En ligne.] <http://halshs.archives-ouvertes.fr/TERRAIN/fr/>
- LAPLACE-TREYTURE, Danièle et SCHMIDT DI FRIEDBERG, Marcella (2009) La territorialità contemporanea nel prisma del soggetto. *Bolletino della Società geografica italiana*, série XIII, vol. II, p.673-688.
- LAZZAROTTI, Olivier (2006) *Habiter. La condition géographique*. Paris, Belin.
- LEVINAS, Emmanuel (1995) *Altérité et transcendance*. Montpellier, Fata Morgana.
- LÉVY, Jacques et LUSSAULT, Michel (dir.) (2000) *Logiques de l'espace, esprit des lieux. Géographies à Cerisy*. Paris, Belin.
- LEY, David et SAMUELS, Marwyn (dir.) (1978) *Humanistic geography: Prospects and problems*. Chicago, Maaroufa Press.
- LYOTARD, Jean-François (1979) *La condition post-moderne*. Paris, Les Éditions de Minuit. (=小林康夫訳『ポストモダンの条件——知・社会・言語ゲーム』水声社(1989))
- LUSSAULT, Michel (2000) Action(s)! Dans Jacques Lévy et Michel Lussault (dir.) *Logiques de l'espace, esprit des lieux. Géographies à Cerisy*. Paris, Belin, p.11-36.
- LUSSAULT, Michel (2007) *L'homme spatial: la construction sociale de l'espace humain*. Paris, Seuil.
- MAINGUENEAU, Dominique (1996) *Les termes clés de l'analyse du discours*. Paris, Seuil.
- MALAURIE, Jean (2009) Edito. *Bulletin de la collection Terre Humaine*, no12, p.2.
- MANCEBO, François (2006) *Le développement durable*. Paris, Armand Colin.
- MANSON, Steven M. (2008) Does scale exist? An epistemological scale continuum for complex human-environment systems. *Geoforum*, vol.39, no2, p.776-788.
- MIAUX, Sylvie (2008) Le piéton: un acteur privilégié de l'espace public barcelonais. *Cahiers de géographie du Québec*, vol.52, no.146, p.175-190.
- MIOSSEC, Alain, ARNOULD, Paul et VEYRET, Yvette (2004) Développement durable: affaire de tous, approches de géographes. *Historiens & géographes*. No387, p.85-96.
- NORA, Pierre (2010) Tristes tropiques, un moment de la conscience occidentale. *Le Débat*, no158, p.3-8.
- ORAIN Olivier (2009) *De plain-pied dans le monde : écriture et réalisme dans le géographie française au XXe siècle*. Paris, L'Harmattan.
- PERROT Martyne et DE LA SOUDIÈRE, Martin (1994) L'écriture des sciences de l'homme: enjeux. *Communications*, vol.58, p.5-21.
- PIERRON, Jean-Philippe (2009) *Penser le développement durable*. Paris, Ellipses.

- PILE, Steve (1993) Human agency and human geography revisited: a critique of "new models" of the self. *Transactions of the Institute of British Geographers*, no18, p.122-139.
- PILE, Steve (2008) Where is the subject? Geographical imaginations and spatializing subjectivity. *Subjectivity*, no23, p.206-218.
- PILE, Steve et THRIFT, Nigel (dir.) (1995) Mapping the subject. *Geographies of cultural transformation*. London, Routledge.
- PRED, Allan (1986) *Place, practice and structure: Social and special transformation in Southern Sweden, 1750-1850*. Totowa (NJ), Barnes and Noble.
- RELPH, Edward (1976) *Place and placeness*. London, Pion. (=高野岳彦・石山美也子・阿部隆訳『場所の現象学——没場所性を越えて』筑摩書房(1991))
- REY, Alain (dir.) (1991) *Dictionnaire historique de la langue française*. Paris, Dictionnaire Le Robert.
- RINK, Fanny (2006) Écrire au nom de la science et de sa discipline. Les figures de l'auteur dans l'article en sciences humaines. *Sciences de la société*, no67, p.95-110.
- RODMAN, Margaret (1992) *Empowering place: Multilocality and multivocality*. *American anthropologist*, vol.94, p.640-656.
- ROSSI, Georges (2000) *L'ingérence écologique. Environnement et développement rural du Nord au Sud*. Paris, CNRS Éditions.
- SACK, Robert D. (1997) *Homo geographicus. A Framework for action, awareness, and moral concern*. Baltimore, Johns Hopkins.
- SANJUAN, Thierry (dir.) (2008) *Carnets de terrain. Pratique géographique et aires culturelles*. Paris, L'Harmattan.
- SCHEIBE, Luiz Fernando (2004) Desenvolvimento Sustentável, desenvolvimento durável. Dans S. Balvedi Zakrzewski et V. Barcelos (dir.) *Educação ambiental e compromisso social. Pensamentos e ações*. Erexim (RS, Brésil), FAPESP, p.317-335.
- SEAMON, David (1980) Body-subject, time-space routines, and place-ballets. Dans Anne Buttimer et David Seamon (dir.) *The human experience of space and place*. London, Croom Helm, p.148-165.
- SÉNÉCAL, Gilles et BOUVIER, Nathalie (2001) L'environnement sous le signe du sujet: aspects des territoires en devenir. Dans Suzanne Laurin (dir.) *Géographie et société*. Québec, Presses de l'Université du Québec, p.109-121.
- SIVIGNON, Michel (2007) L'expérience du voyage et son récit, à propos de *L'usage du monde* de Nicholas Bouvier. *Bulletin de l'Association de géographes français*, vol.84, no3, p.249-260.
- SORRENTINO, Marcos (dir.) (2001) *Ambientalismo e participação na contemporaneidade*. São Paulo, EDUC-FAPESP.
- SOUBEYRAN, Olivier (2007) Pensée aménagiste et tautologie. Dans Jacques Lolive et Olivier Soubeyran (dir.) *L'émergence des cosmopolitiques*. Paris, La Découverte, p.125-153.
- STENGERS, Isabelle (1991) La question de l'auteur dans les sciences modernes. *Littérature*, no82, p.3-15.
- STOCK, Mathis (2004) L'habiter comme pratique des lieux géographiques. *EspacesTemps.net*, Textuel, 18.12.2004, [En ligne.] <http://espacestemps.net/document1138.html>.
- STOCK, Mathis (2006) L'hypothèse de l'habiter polytopique : pratiquer les lieux géographiques dans les sociétés à individus mobiles. *EspacesTemps.net*, Textuel, 26.12.2006, [En ligne.] <http://espacestemps.net/document1138.html>.
- THRIFT, Nigel (1983) On the determination of social action in space and time. *Environment and planning D: Society and space*, vol.1, p.23-57.
- THRIFT, Nigel (2007) *Non-representational theory: space, politics, affect*. London, Routledge.
- TRAJBER, Rachel et DA COSTA, Larissa Barbosa (dir.) *Avaliando a educação ambiental no Brasil*. São Paulo, Editora Fundação Pierópolis.
- TUAN, Yi-Fu (1996) *Cosmos and hearth: A cosmopolite's viewpoint*. Minneapolis, University of Minnesota Press.
- TUAN, Yi-Fu (2006) [1976] *Espace et lieu. La perspective de l'expérience*. Lausanne, In Folio. (=山本浩『空間の経験——身体から都市へ』筑摩書房(1988))
- TURCO, Angelo (2001) Sociotopies : institutions géographiques de la subjectivité. *Cahiers de géographie du Québec*, vol.45, no126, p.269-284.
- VANIER, Martin (2008) *Le pouvoir des territoires: Essai sur l'interterritorialité*. Paris, Economica/Anthropos.
- VIDAL DE LA BLACHE, Paul (1979)[1903] *Tableau de la géographie de la France*. Paris, Hachette, Jules Tallandier.
- WERLEN, Benno (1993) *Society, action and space*. London, Routledge.
- WILBANKS, Thomas J. (1994) Presidential Address: "Sustainable Development" in Geographic Perspective. *Annals of the Association of American Geographers*, vol.84, no4, p.541-556.

## 訳者あとがき

本論文は「主体」という、ヨーロッパ哲学の伝統を負い、かつ近年では扱いが難しくなった概念を地理学の立場から再考する試みである。Cahiers de géographie du Québecの2010年12月の特集号「主体の地理学的形象」において、本論文の著者3名による趣旨説明に続く最初の論文となっている。

著者の一人ヴァンサン・ベルドゥレイは、IGU地理思想/地理学史部会の名誉委員長であり、彼がフランス地理学の動



向を読み解くために用いたconceptual approachについては日本でも複数の論者によって紹介されてきた。共著者2名はベルドゥレイの所属するポー・アドゥール大学の同僚である。ダニエル・ラプラス＝トレチュールはガイドブック分析など地理学の記述方法に関する研究を重ねている。グザヴィエ・アルノー・ド・サルトルは南米などをフィールドとする地域整備の研究者であり、3人が所属するSET(社会空間領域研究所)の所長である。研究の方向性は異なるものの、それぞれが時代や社会、所属階層など、人々の思考や行動を規定する要素のみでは計れない形で個人が存在する状況、主体である状態をいかにとらえ、記述しうるかについて考察している。

地理学の立場という意味でもっとも重要なのは、場所概念との関係で主体概念を読み直すことが提案されている点だろう。場所と切り離さずに考察することによって、主体という概念は一定以上の抽象化を避けることができるとする。普遍化させた定義には慎重でありながらも、この「場所を持つ主体」が近代的主体に対する批判を乗り越える可能性が論じられ、それは「主体と場所の共同構築」という表現で定式化されている。オギュスタン・ベルクの文献が参照されているように、そこに彼の理論 $r=S/P$ との親和性をみることもできるだろう。

その意味で、sujetをデカルト主義を想起させる「主体」と訳すことについて、ベルドゥレイが当初難色を示したことは記しておきたい。別の訳語では著者たちの問い自体が不明瞭になってしまうと考え、納得してもらったものの、他の可能性について検討することも視野に入れなければ、近代的主体批判の枠組みから出することは困難でもある。それは今後の課題として残ったままである。

フランス語圏の議論として、英語圏の動向がシニカルに記されていることも多くの読者の関心と呼ぶところだろう。ベルドゥレイはアメリカで学位をとり、カナダで教鞭をとっていたこともあるため、英語圏の研究者との交流も盛んに行っているが、地理学の多様性を維持する必要性を強く認識しており、フランス語での発信を重視している。(2013年のIGU京都会議においてもフランス語で発表を行っている。)それがフランス語圏のみならず、ラテン系の言語話者の研究者には広く理解されるという有利性は否定できないが、またその分、その中で一定程度、独自性が維持されていることも確かである。独自の理論を生み出そうとするラテン語圏の動向として意識しておきたい。

翻訳という作業に不慣れであるため、読みづらさが残るが、フランス語圏で研究活動を行う著者たちの主張が広く議論されるものとなることを期待したい。